

日本と韓国の未就学児を持つ母親の生活充実感
—『82 年生まれ、キム・ジョン』を手がかりにして—

○岡村利恵（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

問題背景

World Economic Forum（世界経済フォーラム）が発表しているジェンダーギャップ指数によると、2018 年の日本の順位は 149 か国中 110 位であり、韓国は 115 位であった。これはフィリピンやインドネシア、マレーシアといったアジアの国々よりも低い水準である。日本と韓国は女性の大学進学率が高いにも関わらず、女性の社会進出が遅れ、少子化が進行している。池本・韓（2014）は、日本と韓国で女性の社会進出がなかなか進まない共通の理由として、長時間労働と女性に偏る家事・育児の負担を挙げている。一方で、韓国では 2000 年以降、保育制度の拡充、国会議員クォーター制の導入、戸主制度の廃止など、女性支援政策が日本よりも速い展開を見せている（池本・韓 2014）。

韓国では 2016 年に、日本では 2018 年に出版されたチョ・ナムジュ作『82 年生まれ、キム・ジョン』は、タイトルの通り、1982 年に生まれたキム・ジョン氏を主人公としている。ジョン氏が弟の粉ミルクをつまみ食いし娘よりも息子が大切であるという価値観を持つ祖母から怒られるといった幼いときの経験から、ジョン氏が大人になり出産後の再就職に悩むところまで、一人の韓国女性の人生が、女性として生きることの困難、韓国社会で実際にあった変化とともに描かれている。小説でありながらライフコース研究のひとつであると錯覚を覚えるような本であり、日本と韓国の女性の生き方を比較する上で示唆に富むものである。

研究方法

本研究の目的は、母親を取り巻く育児資源や育児規範をふまえ、日本と韓国の未就学児を育てる母親の生活充実感を比較し、どのような共通点及び相違点があるのかを明らかにすることである。母親の生活充実感のほか、家族関係やジェンダー意識ということに焦点をあてて、量的なデータ分析を行う。分析に使用したデータは、2016 年に、日本と韓国の未就学児と同居する 20～49 歳までの母親から得られたものである。データ分析に加えて、井上（2008）の文学と社会学の「相互テキスト性」を意識しながら『82 年生まれ、キム・ジョン』をひとつのテキストと捉え、物語が人々の内面化のプロセスに果たす役割を本研究で探索してみたい。

結果と考察

日本と韓国はともに母親としての役割適応が生活充実感に有意な正の影響を与えており、親や友人との紐帯の強さが母親としての役割適応に影響していた。日本よりも韓国のほうが子育てにおける親や友人との紐帯が強いことが示された。さらに、韓国では近年では親の就労に関係なく無償保育が実施されるなど（李 2016）保育政策が急速に進んでおり、そうした現状も今回分析したデータから読み取ることができた。女性支援制度の展開が家族にどのように影響するのか、日本が韓国の動向から得られる示唆は大きい。

データ提供への謝辞

分析にあたり、お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 石井クンツ昌子教授を代表とする科学研究費補助金基盤研究（A）（課題番号 26242004）により実施された「IT 社会の子育てと家族・友人関係：日本、韓国、米国、スウェーデンの国際比較から」の個票データの提供を受けた。謹んで感謝申し上げたい。

キーワード（生活充実感、母親役割、育児困難）